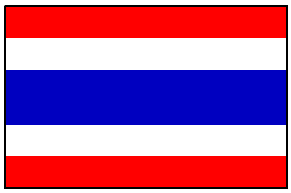
タイ王国　　派遣期間　2013 年 4 月～ 2015 年 3 月



バンコク日本人学校　帰国報告書

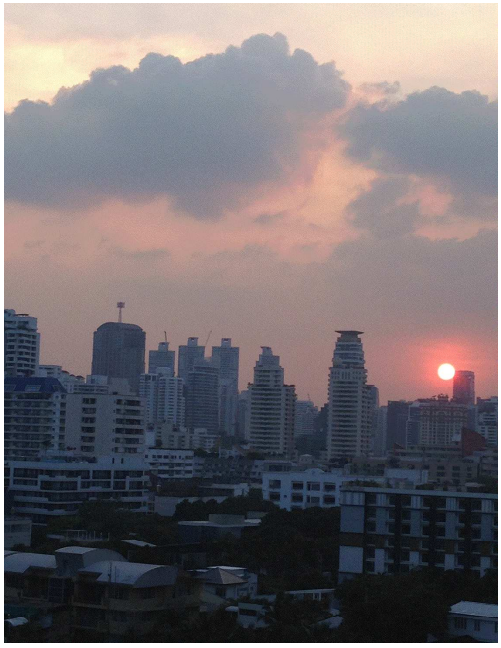
枝幸町立枝幸中学校
教諭　　丸田　かおり

１．タイ王国について

東南アジアの中心に位置し、首都はバンコク。国土面積は約５１万４０００平方キロメートル、日本の約１．４倍である。ミャンマー、ラオス、カンボジア、マレーシアと国境を接している。人口は約６０００万人。民族的には、タイ族が約８５％、中華系が１０％、他モーン・クメール系、マレー系、ラオス系、インド系が暮らしており、山岳部にはそれぞれの文化や言語をもった少数民族が暮らしている。

気候は雨季と乾季があり、気温は平均して３０℃前後である。１年の中で一番暑い月は３月から４月。雨季の始まりが５月くらいからである。

１０月くらいまで１日のうちに何度がバケツをひっくり返したような雨が降り、数時間後には嘘のように晴れる。１１月から２月くらいまでは気温的にも過ごしやすく、観光にも向いている。



バンコクは年々物価が上昇し、地方との格差が大きくなっている。いつもどこかで新しいマンションやビルが建設され、日本人や西洋人を中心にこぞって新しいマンションに引っ越しをする。実際に私も２年間の中で１年ごとに引っ越しをし、とても快適な生活を送らせてもらった。日本で引っ越しというととても面倒に感じるが、ここタイでは全て不動産屋さんやオーナーさんが引っ越し費用を出してくれるし、必要ならば荷物も詰めてもらえる。だからとても引っ越しが楽であった。大きな家具も備え付けがほとんどだし、朝起きて、業者の方が荷物を詰めてくれ、昼には新しい家で快適な生活が送れた。多くの日本人学校の先生や生徒はタイに滞在している間に引っ越しを経験しているのも事実である。特にバンコクにおいてはタイ人のた

めというよりはビジネスや観光で来ている外国人のためにどんどんと新しい建物を建設している雰囲気を感じる。マンションもそうだが、デパートの数も相当数ある。バンコクには BTS という地上を走る電車がある。この駅を中心にマンションやデパートが建つのだが、私が滞在中も続々とデパートが建設されていた。数駅いったら同じデパートがあるにも関わらず、である。それだけ需要があるのだと思うが利用者は西洋人、日本人、タイの富裕層といったところである。

このように、バンコクはまさに「今」発展し続けているエネルギッシュな街であった。

２．バンコク日本人学校の特色

（１）歴史ある日本人学校

バンコク日本人学校の最大の特徴と言えば、その規模と日本人学校の中で一番古いということである。バンコク日本人学校ができたのは昭和３１年。この当時はわずか数名という児童・生徒数であったが、みるみるうちに児童・生徒数は増加していった。それだけ、タイと日本企業の友好な関係がうかがえる。平成２７年度には児童・生徒数は小学部と中学部を合わせて３０００名を超えた。まさに超マンモス校と言えるだろう。そして、転出・転入が非常に多いことも特徴と言える。それだけ企業の中での出入りや異動が多いのだと考えられるが、生徒もそのことには慣れている様子であった。

（２）小中併設を生かした指導

小学部３～６年生に対しては英会話の授業において NET（母国語が英語の教師）と中学校での英語指導の経験をもつ教員が授業に加わり、よりレベルの高い授業を組み立てて実践している。また、小学部５，６年生になると理科・図工・家庭科にも専科教員を配置している。小学部６年生になると教科担任制を導入し、より専門的な学習指導を展開している。中学校での学習へ円滑に接続できるよう早いうちから取り入れている。よって、小学部高学年の教員は日本で中学校の教員を経験してきた人がなることも多く、タイに赴任して初めて小学生を教える経験ができる可能性もある。中学校しか経験したことのない教員は最初、戸惑いをみせるが、帰国する際には良い経験になったと言って帰国する教員がほとんどである。

その他、家庭科の授業での保育実習の一環として、中学３年生が小学１年生と触れ合う活動を通して子どもの発育を学ぶ学習が行われている。同じ校内に小学部と中学部があるのでとてもスムーズに行える。また、中学部の合唱コンクールへ小学部６年生を招待し、中学生の少し大人びた歌声を聴かせ合唱への意識付けをさせたりしている。このような様々な交流を通して心身の発育に良い影響を及ぼしている。

（３）１年中水泳三昧

北海道では学校でプール授業がない場合もあったが、タイではその気候を生かして１年中水泳授業がある。体育の授業の中でおよそ週に１回、水泳授業があった。しかも小学部５年生の時にはフアヒンに行き、遠泳を行うことになっているため、タイに長く滞在している子どもたちで泳げないという子どもはほとんどいない。しかも体育の時間には体育教員の他にタイ人の水泳コーチがつくのでコースに分けて丁寧に指導してもらえる。だから水泳授業に抵抗がある生徒も少ないし、むしろ楽しみにしている生徒が多かったことが印象的である。

（４）タイに住む良さを生かした学習

小学部１年生から中学部３年生まで必ずタイにまつわる場所や人との校外学習がある。中学部で言えば、１年生のときにタイの大学生と交流学習を行う。そこで互いに文化を伝え合うという学習をしている。３年生ではインターナショナル校に行き、実際に授業を体験したり、スポーツをして様々な人種の人と触れあう活動をしている。また、タイの大学に行き、学校見学や授業見学をしている。

その他、全学年においてタイ語の授業も行われている。日本語が話せるタイ人の先生が習熟度別に分かれて授業を週１回行ってくれる。タイ語だけではなく、タイの文化も交えながらタイに興味も持ってもらえるよう丁寧な指導をしている。ちなみに学期に一度、テストも行われ、成績もつくようになっている。

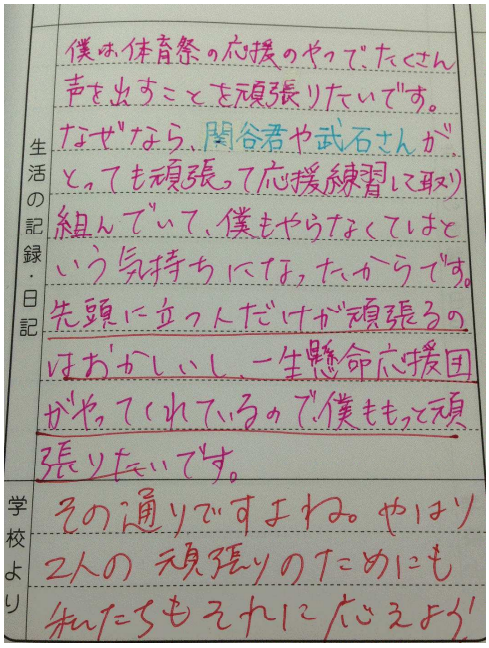
３．限られた時間の中でいかに生徒との時間を生み出すか

（１）放課後がない

多くの日本人学校がそうであるように、ここバンコク日本人学校もバス通学である。バス通学の弊害。それは「始まりと終わりの時間が決まっている」ということである。つまり、限られた時間の中で生徒との時間を生み出す必要がある。行事の準備やつまずいたところの学習、生徒指導など学校では授業時間以外で生徒との関わりをもたなければ進まないことが多々ある。その時間を日本人学校ではどう生み出そうかと大いに考えた。その結果、朝バスで通学してから朝の会が始まるまでの約１時間をうまく使おうと考えた。教員たちもバンコク日本人学校ではバス通学か自家用車（運転手付き）である。家族がいれば自家用車の方が得な場合が多いが、単身だと断然バスがお得である。

バンコクの朝は早い。なぜなら、バンコクは渋滞がひどいからである。朝７時を過ぎる頃にはもう渋滞があちらこちらで始まり、全く前に進まない。夕方も同じである。１７時くらいから１９時くらいまでは渋滞が続く。そして雨が降ったときなどは時間に関わらず、渋滞になる。普段は１０分で着くようなところも渋滞にはまれば１時間はくだらない。それほどバンコクの渋滞は深刻なのである。よって私も毎朝５時には起床し、６時過ぎにはバスの迎えが来て毎朝眠い目をこすりながらバス通勤していた。そして７時前には学校に到着し、今日の予定などを確認し、７時過ぎに教室に行く。早い生徒だともう登校しており、朝のひとときを共に過ごす。７時３０分くらいまで教室にいられたのでその時間までだとおおよそ７割の生徒が登校しており、ある程度の用事を済ますことができた。行事の準備、提出物のこと、生徒指導、学習指導、教育相談。私が教室にいるだけで朝の時間を有効的に活用できることを知った。そのあと朝の職員打ち合わせがあり、雑用を終え１５分くらいしてまた教室に戻りるとほぼ全員が登校しているので７時５５分からの朝の読書までの１０分間で残りの用事を済ませることが多かった。この他、休み時間も教室に行き、生徒と話たり、様子を見ていたりしていたし、授業以外で生徒と触れ合う時間を意図的に多くした。このような積み重ねが生徒理解にもつながったし、生徒から相談しやすい雰囲気作りにもつながっていたことを知った。まさに、「生徒からの信頼は生徒と過ごす時間に比例する」ということを実感した瞬間でもあった。

（２）生活ノート



バンコク日本人学校中学部では１年ごとに全員に生活ノートが配付される。主に明日の時間割と準備物を記入するのだが、最後に「生活の記録・日記」を書く欄があった。北海道で勤めていた際にはこのようなノートはなかったので活用の仕方がよくわからず、赴任した１年目は好きなことを書かせていた。生徒が書いてきたことを先生に見せるために毎朝提出する習慣もあり、担任は毎日空き時間を使って生徒が書いてきたことにコメントを書くようになっていた。このコメントを書くのが最初は大変で昼食時間を削ってまで書いたこともあった。正直「意味があるのかな。」と思ったこともあった。しかし、それはただ書かせっぱなしの私にも問題があり、この生活ノートに意味をもたせるしかけが必要だなと１年目を終え感じた。

２年目の春、毎日お題を与え、生活ノートを書かせることにした。例えば、「１年間の目標」、「今週の MVP」、「お隣さん紹介」など自分のことだけではなく、クラスの輪作りにも一役かってもらえるようなお題を考えた。そして毎週発行する通信にも掲載し、クラスメイトの作品を読む機会も与え、保護者へも紹介した。最初はお題を出すことへの抵抗がある生徒もいたが、すぐに慣れ逆にフリーにすると書くことがなく困っている生徒もいた。お題を出すことにより、何を書いていいかわからないという生徒が減り、提出も促しやすくなった。そして１年を終えた頃には生徒にも達成感と１年間の軌跡を感じることができるノートとなった。

（３）特殊な進路指導

バンコク日本人学校に限らず、世界の日本人学校には全国から生徒がやってくる。北海道にいた頃は地元のごく限られた場所に限っての進路指導の知識だけを備えていれば対応できたが、日本人学校ではそうはいかない。日本人学校での勤務が決まり、中学部３年生に配属が決まったときは一番に進路指導が不安でならなかった。どのように全国の公立私立高校の進路指導に対応するのか。想像もつかなかった。実際、全国の高校の知識を身に付けることは不可能である。では、どうするのか。それは保護者の協力である。保護者が中心となって情報収集をしてもらい、それを私たちが整理し、進路指導部長が日本との連絡調整などをとるシステムになっている。もちろん、保護者任せになっても困るので保護者の情報をもとにイン

ターネットで調べたり、直接高校に問い合わせることもする。そして日本人学校の進路は早くから始まる。早い生徒だと１０月に入試がある。よって私たちの調査書書きも夏休み明けにはすぐ始まり、２月頃まで続く。調査書の数も尋常ではなく、一人平均４校くらい受験するので１００枚くらいは作成することになる。パソコン作成が可能なものから手書きしか認められないものまで各学校により様々なので注意書きを読むのも一苦労である。進路指導がピークのときは夜遅くなることも多く、苦労したことを覚えている。

進路指導に関しては様々な思いがあるが、進路実現につながった際の喜びはひとしおであった。進路業務はまさに学年と保護者との連携がとても大切になってくる。一つのミスも許されない中で、周りの先生方と何度も確認し合いながら生徒の将来のために懸命に作業をこなす必要がある。粘り強く、最後まで集中力を切らさないように慎重に行うことを忘れてはならない。

４．バンコクでの生活について

（１）厳しい平日、贅沢な休日

バンコク日本人学校は朝が早く、帰宅時間の平均も８時くらいと平日はハードである。しかし、休日は日本にいた頃よりも自由な時間が多かった。部活指導もないため、普段の土日に限らず長期休暇も長い休みを取ることができた。様々な規定があるので長期休暇全てを休みにすることはできないが、それでも旅行に行くことを励みに平日の勤務を頑張ろうと思えた。私はバンコクにいる間、国外には６カ国、タイ国内でも飛行機を使って何度か旅行をした。しかし、勘違いをしてはいけないのは私たちは働くことを目的に赴任しており、旅行をするためにきているのではない。仕事を第一に考え、それでも時間があるときに旅行に行くことにしていた。

（２）第二の日本

また、バンコクは「東京都バンコク区」と言われるくらい日本人のための設備が整っている。例えば、日本食レストランはいたるところにあるし、スーパーも日本食が山のように売られていた。お金さえ出せば手に入らないものはないというくらい日本食には困らなかった。ただ、せっかく海外で生活をしているのでタイ料理も満喫した方が良いと思いタイ料理を食べることも多かった。タイ料理の他に、イタリアンもあったし、中華料理も焼き肉屋さんも何でもあったので週末は外食をして気分転換を図ることも多かった。

また、長期の海外生活で困ることの一つに病気やケガがある。赴任前はとても心配して

いたのだが、バンコクは立派な病院がいくつもある。しかも日本人専用のカウンターまであり、私も何度がお世話になったが、困ることはなかった。タイは１年中、インフルエンザが流行しており、学校でもいつもどこかで流行っている。私も一度、インフルエンザにかかったことと卵で食中毒のような症状になったことがある。どちらも病院に行き、適切な処置をしてもらった。

内科や外科といった病院から小児科や歯医者まで日本人対応の病院は揃っている。産婦人科もあったので、バンコクで子どもを産む人も多かった。

美容院も日本人経営のお店が多く、東京や大阪の美容室の人に切ってもらえたのでかえって北海道にいるよりもおしゃれな髪型にしてもらえたような気がする。

治安においても良い方だと思う。私がいた時期はちょうどデモが多く、クーデターもあり、日本での報道もけっこうされていたようだが、実際に被害にあったことはない。学校が何度が休校になるともあったが、これも危険を回避してのことである。その他の日常生活でも夜一人で明るい道であれば歩くこともできたし、街中にも買い物に行くことができた。そのように考えると女性一人でもとても暮らしやすかった。

このように、バンコクは日本にいる生活とほとんど変わらない暮らしをすることができた。だからと言って、これが海外での当たり前と思ってはいけない。そのことは、私たちが渡航する前からも赴任してからも常に言われ、私たち自身も肝に銘じてきたことである。いつも油断してはいけない緊張感を持ちながら生活をしなければならないことはどこの国でも同じことであろう。

５．おわりに

私が在外教育施設派遣教職員を志望した最大の理由は自分の力量を上げることである。自分の力量を上げることが生徒へも周りの同僚へも必ずプラスになると考えるからである。日本人学校に行くまで私が日本で勤務した学校は２校。どちらも全校生徒が１００名以下の小規模校だった。小規模しか経験しないまま中堅と呼ばれる教職１０年目を迎えてよいものかと思った。もちろん異動も考えたが、様々な規定があり叶わなかった。ならばどこの国、どんな規模の学校に行くかわからないが、日本人学校で働くことができたなら

少なくとも今よりも様々な経験を積むことができるだろうと考えた。結果、世界で一番大きな日本人学校に赴任が決まり、最初は戸惑いもあったが、行くしかないと覚悟を決めた。所属も中学部３年生と言われ、「どうして私のような小規模校かつ経験が浅い教員を３年生に？」とも思ったが、今考えるとそのような疑問は持つ方がおかしいことがわかった。なぜなら、在外教育施設派遣教職員に応募し選ばれた時点で即戦力として働くことが期待されているからである。私にはその自覚や自信が足りなかったように思う。そのかわり、赴任してからは学校に慣れようと必死で先輩方から学び、少しでも即戦力となるように自ら動くことを意識した。日本人学校に勤務した２年間は本当に過酷であったが、中身の濃い充実した日々を過ごすことができた。そして２年間の中で２度、卒業生も出させてもらい本当に感謝している。また、日本全国に尊敬できる仲間ができたことも一生の宝である。ここでの経験は私にとってかけがえのないものとなった。